

# アート・キャラバンを振り返って

柴田百合子

東日本大震災より3年近くが過ぎ、もはや復旧復興という段階でもあるまいという機運も高まってきたが、実際には、遅々として目に見えない回復や改善に心身の疲労度の度合いは下がる様子を見せない。殊に、福島第一原発事故後の経過は、避難を余儀なくされた人々ばかりか、避難者の受け入れ先となったいわき市民の心にも少なからぬ影を落としている。命の、生活の基盤が足元から揺さぶられ、必死でバランスを保とうと緊張を強いられた長い3年である。もはや、美術館や芸術文化など念頭に浮かばない必死の3年だったことだろう。

しかし、アート・キャラバンは、そんな状況の中でも、好奇心が強く、遊び心が豊かで（中略）声を上げて笑える市民を目の当たりにすることができ、我々自身がアートの魅力を実感する機会となった。

かつて美術館が開館した当時のいわき市は、豊かな自然と平穏な日常に溢れ、美術館の必要性を感じないことも理解できた。しかし、ひとたびその平穏が脅かされた時でも、アートがずっと人間の心の拠り所であったことを、今回、大いに具体的に体感できたことは不幸中の幸いかもしれない。“人に寄り添うアート”のあり方を、さらに積極的に調査研究し、市民の中に運び込む活動の実践を今後も検討できればと考える。

（『平成25年度いわき市立美術館年報』「東日本大震災 報告III」より抜粋<sup>\*1</sup>）

## はじめに

平成23年、東日本大震災による休館や企画展の中止を余儀なくされた美術館が、アートを拠り所にどのよう

にして市民に手を差し伸べられるのかを模索しながら開催したアウトリーチ事業「みんなで元気になるアート・ワークショップ・キャラバン」、翌24年には、前年度の取り組みの報告を兼ねながら復興支援を申し出てくださったアーティストによる新たなプログラムを加え美術館で「みんなで元気になるアートのひろば」を開催、さらに、25年度、26年度には、空調設備改修工事に伴う休館期間を活用し、「みんなで元気になるアート・キャラバン」の第2弾、第3弾を実施、その詳細をDVDと冊子による報告書としてまとめた<sup>\*2</sup>。25年度の年報では、26年度事業の「アート・キャラバン3」への参加申し込みが殺到する中、これまでの取り組みを振り返り今後の普及活動の展開について所感を述べた（冒頭参照）。そのうえで翌年の予算編成前に、この3年余りの活動を通して実感した継続の必要性について館内で協議し、美術館での通常業務と並行してでも実施可能なプログラム、開催時期、開催方法などを再検討したうえで、開館以来の普及事業であった移動美術館の解釈と予算組を改正。平成27年度より改めて、移動美術館「アート・キャラバン」を実施することとなった。

過去4年にわたる事業は、企画展事業として予算編成ができたが、「アート・キャラバン2015」以降は、普及事業費280万円余（令和2年度は300万円）の中から約60万円を割り当て外部講師謝金、交通費、ワークショップ材料費などを捻出することになるため、プログラム編成には苦慮した。それまでの活動同様に、外部講師の協力も得て、美術館や造形活動などにあまり親しみのない高齢者や遠隔地の参加者に対し、楽しみながらアートに接することで美術館の活動を体験し、美術館に興味を

<sup>\*1</sup> 『平成25年度いわき市立美術館年報』 いわき市立美術館、2014年、72-73頁。

<sup>\*2</sup> いわき市立美術館 『みんなで元気になるアートのひろば 活動報告書』 いわき市立美術館、2013年。いわき市立美術館 『みんなで元気になるアート・キャラバン2』 いわき市立美術館、2014年。いわき市立美術館 『みんなで元気になるアート・キャラバン3』 いわき市立美術館、2015年。

持つてもらえるような多角的なワークショップを提供してゆきたいと考えた。それゆえ外部講師を選定するにあたっては、過去の実技講座やワークショップの講師経験者の中からいわき市在住者に限定して選出し、本プログラムについての協議を重ね、その趣旨を十分理解し趣旨に適ったプログラムを考案していただいた。実際に事業の展開を始めてからは、対象者が造形活動に不慣れなこと、一コマの時間が1時間半から2時間と制限されていることから、準備物などについて講師の負担が大きすぎるもの、制作に時間がかかりすぎるもの等は継続を断念し、新たな切り口で講師を選定する必要も出てきた。

各学芸員が担当するプログラムについても同様で、「みんなで元気になるアート・キャラバン3」まで実施していたサンドブラスト技法は、小さな集会所や学校施設など、防塵対応が十分でない会場が多いこと、担当者の長期にわたる人体への影響などを考慮して「アート・キャラバン2015」以降は中止し、ルーターを用いたグラス・エングレービングのみに修正してプログラムに加えた。参加申し込みも多く、年齢性別を問わず人気の高かった「スイーツ・アート」は、材料費の負担があまりに大きいため「アート・キャラバン」シリーズからは削除。さらに、仕上がりに個人差があり、失敗して満足感が得られない参加者が多かった「どろだんご」も外した。

また、初年度は、「みんなで元気になるアート・キャラバン3」に関わった普及系の学芸員だけで事業を分担したが、美術館での企画展事業、普及事業などとの両立が難しいこともあり、その負担の軽減と企画展事業のPRをかねて全学芸員で分担できる「展覧会を10倍楽しむセミナー」を28年度の「アート・キャラバン2016」より導入。企画展の担当が、展覧会の見どころやグッズ紹介など、それぞれの魅力を独自にPRし展覧会場へ誘う内容で、初年度は2会場だけだったが、29年度には、このセミナーに参加することを目的とした市民講座を立ち上げ参加者を募って「アート・キャラバン」に応募する公民館が出現、令和2年度には、同様の公民館が2館に増え、さらには令和3年度も継続して欲しいとの希望が3館から寄せられる事態となっている。どの公民館でも「展覧会を10倍楽しむセミナー」の人気は高く、定員をはるかに超える応募があつて抽選が必要になったとの報告があつたのが興味深い。内容は同じなのに、美術館で募集しても美術講座やギャラリー・トークに定員を超える人が殺到するようことはまずないため、なぜそんな

に人気なのかを公民館関係者に聞いてみると「美術館に行つてはみたいけど一人では入りにくい。でも公民館の仲間となら行ける。」という心理が大きく影響しているのではとのこと。気心の知れた参加者同士で学芸員の解説で事前学習し、その足で会場を訪れることで、仲間との話も弾み、より理解度が高まるような充実感があるとの感想も多々聞こえた。公民館の地域密着力に感服するとともに、開館して30年以上経つても、まだまだ「美術館は敷居が高い」ことを痛感した。

東日本大震災より10年が経過し、「アート・キャラバン」シリーズは、一応の役割を果たしたとの合意により令和2年度をもって終了となる。「展覧会を10倍楽しむセミナー」のように、アウトリーチにこだわらず開催できるプログラムは、さらに改善して館内での普及事業に活用されることになった。これを機に「アート・キャラバン」シリーズを振り返りながら、今後への展望が開けるか探ってみようとする。

## 移動美術館「アート・キャラバン」事業概要

**開催趣旨：**アートを通して日常生活に活気と潤いをもたらす。アートへの興味関心を刺激することで美術館事業への理解や興味を促し、牽いては、来館者増員に繋げる。

**募集対象：**学校、公民館、PTAや子ども会活動、学童保育活動、小規模なサークル活動、保健福祉施設等でのレクリエーションなど、美術館に来館しにくい施設やサークルにも、本事業の機動性をアピールし活用を呼びかけ参加を募る。

**開催形態：**年齢を問わず、気軽に楽しめるワークショップ・プログラムを持参して、参加者の希望する会場へ出向いて事業を実施する。材料費等の参加者負担は最低限に抑える工夫をし、色材、工作用具など共用できるものは美術館が持参する。

## プログラムの変遷

### 【外部講師対応】

#### ●「お茶のおいしさ、お茶のたのしみ」

アート・キャラバン2015/2016

#### 「お茶のたのしみ、お茶のおもてなし」

アート・キャラバン2020

講師：梶塚宏之（日本茶インストラクター・リーダー）

高原あかね（日本茶アドバイザー）

対象：小学校中学年以上

定員：20名程度

開催回数上限：4回

内容：専門家によるお茶の基礎知識に触れながら、煎茶の淹れ方、お茶の活用方や季節ごとの楽しみ方、日本の伝統的な食によるおもてなしの心を学ぶ。夏場には、氷水で淹れる冷茶やシェイカーを用いて簡単に抹茶を立てる方法など、専用の茶器が家庭になくとも味わえる緑茶の魅力を紹介。埼玉、静岡、京都、福岡など、全国の特徴ある茶葉を取り揃え、茶歌舞伎などの伝統的な遊びも体験。健康茶やカフェインの少ないほうじ茶、煎った玄米を加えた玄米茶など、日本人の生活の中で多様に活用されるお茶の奥深さを紹介。茶葉の管理や喫茶以外の活用法、お茶成分の効能、お茶を活用した遊びなど、対象にあわせたわかりやすい解説が年齢を超えてお茶文化への興味をそそる。

必要時間：1時間30分～2時間

参加費：アート・キャラバン2015では300円 これ以降は500円

使用用具：茶器（急須、湯冷まし、茶碗） 講師が持参茶葉（煎茶、日本紅茶、ほうじ茶、抹茶など）

※季節に合わせて、冷茶用ポット、抹茶体験シェイカーなど

※参加会場には、お湯の準備、水場の確保、残ったお茶やお湯などを廃棄できるバケツなどを準備してもらおう。

開催結果：味覚や視覚を活用した日常の中のアート体験として「みんなで元気になるアート・キャラバン2」から取り組んできたこのプログラムは、高齢者を中心に希望が集中する傾向があるため、この事業では、食育、日本文化やマナーの理解という視点から、小学校中学年以上を中心とした初参加者を対象に募集をしたところ、初年度より小学校や公民館のジュニアリーダー学

級、学童保育施設などの応募が寄せられた。家に茶器がない、ペットボトルのお茶しかないという家庭が多い中、茶葉を観察する、食べてみる、自分で淹れて飲んでみるという体験は、子どもたちの好奇心を大いに刺激し、「おばあちゃんの家に行ったら淹れてあげたい。」との声が上がった。お茶の葉を食べて、苦い、渋いだけでなく、甘みや塩味まで感じることで鋭い味覚の持ち主もいて興味深い。自然食材や食物アレルギーに配慮した手作りのお茶菓子は、漬物、水ようかん、豆乳ムース、あられ、どら焼き、白玉ぜんざいなどを対象年齢を考慮してアレンジしたもので、季節や年中行事にあわせ、かつてはどこの家庭でも手作りしていた懐かしい味わいが年齢を超えて喜ばれた。



講師の梶塚宏之氏（錦公民館にて）



水を使った冷茶の楽しみ方



白玉ぜんざい あんこは二日酔いにも効果あり



立ったままなのも忘れるぐらい夢中（高久公民館にて）



お茶の葉を食べてみる（大浦小学校にて）



洋風お菓子には和紅茶を添えて



お茶の葉ってこんなに広がるの？（飯野公民館にて）

●「織りを楽しもう！ 織って、編んで、すてきなオブジェ作り」

アート・キャラバン2015

講師：織田千代（造形作家）

対象：小学生以上

定員：20名程度

開催回数上限：4回

内容：織り機がなくてもタテ糸とヨコ糸を編みこむことで織り体験ができるプログラム。これまでの織りのイメージを覆す自由で楽しいオブジェ作りに挑戦する。

必要時間：1時間30分

参加費：無料

使用用具：作品の支柱になる加工した針金（人数分）

講師が持参

毛糸とじ針（プラスチック）

※不要になった毛糸、はぎれ、その他織り込んでみたいものは各自が持参

※可能であれば、出来上がった作品を吊り下げて皆で合評できるスペースの確保を依頼。

開催結果：織りのイメージから織り機を想像した参加者もいたようだが、講師がひとつひとつ手づくりした支持体に毛糸や端切れを編みこんでゆく作業に驚きと楽しさを味わっていたようだ。糸や布の始末も、長いまま残して吹き流しのような面白い効果を出したり、糸や布でないものを織り込みたいという参加者は、それらを細い針金で包み込むように加工して糸や布に絡めて織り込んだり、支持体に直接ぶら下げる方法を教わり、さらに面白い表情を持つ作品となった。高齢者対象の場合は、あまり冒険せず、織りそのものの原理を理解して糸や布の配色の面白さを体験できるようにアドバイスを行うことで、織りそのものがより身近な手仕事であることを体感してもらえたようだった。

しかし、このプログラムについては、対象に合わせて講師がひとつひとつ支持体を制作する必要があることから、その後プログラムから削除した。内容的には、ファイバーワークの原点を体感的に理解し興味関心を促すものであることから、今後の普及事業の中で予算、対象などを再検討して改めて実施するのも可能なプログラムと考える。



講師にアドバイスをもらって（大浦小学校にて）



みんなで合評会（大浦小学校にて）



中学生は材料づくりから挑戦（平第三中学校にて）



器用不器用関係なしが楽しい

●「エッシャーのように絵を描こう “うずめ模様”で楽しいアート体験」

アート・キャラバン2016

講師：安斉重夫（彫刻家/元高校数学教諭）

対象：小学生高学年以上

定員：20名程度

開催回数上限：2回

内容：正四面体を使って型紙を作成し、その型紙を使って「うずめ模様」（敷き詰め模様）を描く。うずめ模様ができるまでの過程やそこから各自発想する新たな模様の不思議を実感できる内容。

必要時間：2時間程度

参加費：無料

使用用具：正四面体（人数分） 講師が加工して持参  
白い紙（B4コピー用紙、画用紙など）、筆記用具、はさみ、カッター、彩色用クレヨンや色鉛筆など

開催結果：正四面体の四つの頂点を一度だけ通りながらフリーハンドの線を描いた後、その線にそって切った型紙を用いるとエッシャーの作品にも登場する「うずめ模様」を描くことができる。なぜそうなるのかという原理の説明は、対象の理解度を押し量りながら講師が加減して説明し、エッシャーの作品世界や自然観などを作成見本を見ながらわかりやすく紹介することで数学への興味や制作への関心を引き出した。正四面体は正確さが要求されるため、参加者分を講師が準備。参加者はフリーハンドで線を描くところから出発。切り抜いた型紙を互い違いに組み合わせて出来てゆく「うずめ模様」の不思議さ面白さを体験した後、そこから各自が新たな模様を発見し彩色することでオリジナリティ溢れるアートが完成する。短時間のワークショップだけでは、正確な原理の理解には及ばず、「不思議」という感想止まりではあったものの、「面白くて熱中してしまう」という当初の目論見は達成された。参加者は、高校生のグループと小学校中・高学年のグループの2組だったが、見本作品の真似をしようとする参加者も見かけられた一方で、高い集中力、発想力を発揮したオリジナリティに富んだ作品に仕上げる参加者も高学年に多く現れた。

しかしこのプログラムも、講師の事前準備の負担が大きいこと、また、彫刻家として本来希望している内容と異なることなどを考慮し、その後のプログラムからは削除した。



うずめ模様制作中（磐城学芸専門学校にて）



うずめ模様の説明をする講師の安斉重夫氏  
（磐城学芸専門学校にて）



個性豊かな作品が次々に（磐城学芸専門学校にて）

● 「“福興だるま”に願いを込めて！」

アート・キャラバン2017

アート・キャラバン2018

アート・キャラバン2019

講師：山本伸樹（美術家）

対象：特に制限しない

定員：30名程度

開催回数上限：6回

内容：福島県の復興と怒りや抗議のシンボルとして“福興（ふくおこし）だるま”の制作とワークショップを続けている山本氏を招き、氏がだるまに込める思いや絵付け方法などを聞きながら、参加者一人一人の祈りや願い、メッセージを込めたオリジナル福興だるまを制作。

必要時間：1時間30分程度

参加費：500円

使用用具：絵付け用白河だるま（人数分）講師が手配  
絵付け用アクリル絵の具、絵付用筆3種（大、中、小）、  
紙皿、紙コップ、雑巾

※会場では、養生シート、バケツ、テーブルの養生などの準備を依頼。

開催結果：福島県では地域によって表情や絵柄の違うだるまが複数存在するが、その理由やだるまの由来、歴史などをレクチャーした後、講師がこれまで開催してきた各地のワークショップの参加者による参考作品の図像や作家自身のだるま作品などを見ながら「オリジナル福興だるま」制作に着手。伝統的なだるまの絵付けにこだわる高齢者にも、自分らしさ、現代らしさ、願いやメッセージ性をわかりやすく促しながら少しずつ個性を引き出してゆく。アクリル絵の具の特性として乾いた上から再度彩色が可能であること、乾く前に筆を加えると絵具の混濁や垂れ、剥げ落ち、にじみなどが起きることについて、失敗する参加者が出たらその都度、繰り返し説明し、手ほどきしながら作業を進めてもらった。伝統的な絵付けを模したり講師作品の真似をする参加者が多かったものの、子どもたちが絵付けした参考作品に触発されてその模倣をする参加者や個性的な絵柄やメッセージを描き込む参加者も一方には見受けられたのが興味深かった。

高齢者や小学生を中心とした希望の多いプログラムで、毎回抽選にもれる会場が出てきてしまうため、2019以降は、山本氏と協議し、「アート・キャラバン」

事業とは別に希望会場が個別に山本氏と連絡をとれるようにしたところ、氏と直接連絡を取り合って独自にワークショップを開催できる会場が増えた。市内講師については、今後もこのようなケースを参考に、美術館以外での文化事業に有益な人材を紹介できることも普及事業の重要な役割であると考えている。



だるまの歴史を語る講師の山本伸樹氏（泉公民館にて）



難しいと思ったけど結構楽しい（玉川会館にて）



現代アートを意識してオリジナルに挑戦中（豊間公民館にて）

●「声とことばのワークショップ 声を出して元気力アップ！」

アート・キャラバン2017

「声とことばのワークショップ 音声学に挑戦！」

アート・キャラバン2018

アート・キャラバン2019

講師：森絵留（盛名劇団かもめ主宰）

対象：特に制限しない

定員：特に制限しない

開催回数上限：6回

内容：2015では、震災後も続く極度の不安や緊張、疲労感などを払拭するリラックス、リフレッシュ法として、みんなで楽しく声を出したり身体を動かしたりしながら、健康に役立つ呼吸法を学んだ。2016以降は、いわき市民が苦手とするアクセント、イントネーションなど日本語の音声学に特化し、各地の方言や標準的な発語法、講師自らが体験したいわき特有のコミュニケーション術などについてレクチャーや発声、音読ゲームなどを通して楽しく学ぶ。

必要時間：1時間30分

参加費：無料

使用用具：対象に合わせた発声用テキスト（A4サイズ2枚）、方言地図、ゴム風船等 講師が持参

※会場には、身体を動かせる程度の広さ、声を出しても支障のない場所を確保してもらう。

開催結果：高齢者には、特に誤嚥性肺炎予防の呼吸法や喜怒哀楽の呼吸などを体験しながら、声を出したり身体を動かしたり大声で笑ったりする中からリラックス効果を体感してもらえるプログラムを提供。発語障害や発達障害のある子どもを含む幼児たちには、簡単な楽器演奏やダンス、歌などを介して楽しさ、高揚感のあるコミュニケーションを実感させる工夫をした。2015に実施した中で、いわき市民特有のアクセントに対するコンプレックスやそれに伴う他地域の人たちとのコミュニケーションにおける違和感、さらには、いわき市民同士のアクセント無視の独特なコミュニケーション力などが浮かび上がり、2016よりは、そこに着目していわき地区の対話の個性を確認し、他地域とのより円滑なコミュニケーションを図るための音声学を学ぶプログラムを開始。他地域から移住した市民との対話の中でいわき特有のアクセントの崩壊が浮き彫りにされる驚きや、音声学上のアクセントの難しさに

悪戦苦闘しながらも大笑いしながら体験する楽しいプログラムとなった。子どもたちについても、核家族化が進む地域と複数世代が同居する家庭が多い地域とでは差異があり、幼児の頃からの耳の発達が重要なポイントであることを改めて認識する機会となった。このプログラムも女性を中心に人気が高く、美術館を介さず直接講師と事業開催の協議ができるよう講師の快諾を得ている。



発音の指導をする講師の森絵留氏（中之作区民会館にて）



いわき弁って知ってっけ？（小川学童クラブにて）



口の開け方を鏡で確認（中之作区民会館にて）

### 【美術館学芸員対応】

#### ● 「岩絵具で遊んじゃおう！」

アート・キャラバン 2015～2020 まで継続

対象：特に限定しない

定員：25名程度

開催回数：対応できる限り

内容：日本画用の絵具を使った塗り絵体験。特に岩絵具の独特な手触りや使い方、発色の違いなどを簡単な塗り絵を通して楽しく味わう。季節の風物や浮世絵、植物、抽象的な模様などの下絵の中から対象や季節に合わせた20種程度を選定して持参、各自が好みの下絵を色紙にカーボンコピーした後、日本画材で彩色する。

必要時間：1時間30分

参加費：無料

使用用具：<sup>どうきび</sup>礬砂引き色紙（参加会場が準備）、岩絵具・顔彩など日本画材一式、カーボン紙、赤ボールペン、紙コップ、アルコール含有ウェットティッシュ、ティッシュペーパー、雑巾

※会場には、バケツ、水場近くの会場を準備してもらう。

担当学芸員：柴田百合子

開催結果：幅広い年齢の参加が多いプログラムで、当初は20名程度の参加者を募集したが、常に定員を超える状態だったため2016からは画材を増やして25名定員とした。それでも足りなくなる時には、水彩絵の具などを持参してもらったり、複数人で画材を共有してもらった。なるべく日本画の用具にも直接親しんでもらいたいため、梅鉢、溶き皿なども人数分持参したが、大人数の学童保育や学校の授業については、破損の危険を回避して紙皿、紙コップで代用した。大人についても、筆洗の代わりに紙コップを準備し、岩絵具の廃棄管理には十分注意を促しながら、まめに汚水を取り替えることを推奨した。

このプログラムに特徴的なのは、絵を描くということに消極的な高齢者や落ち着きのない子どもたちの集団が、自分で選んだ下絵をカーボンコピーし始めると激変することだった。これには、どこの会場の担当者も一様に驚きを口にした。少しずつ色紙に映し出される下絵を何度も確認しながらほぼ30分近く集中し会場はいつきに静かになる。下絵が完成した段階でほぼすべての参加者が満足感を覚えるようで、さらに彩色への興味と関心が引き出される様子が毎回興味深く感じ

られた。

子どもたちに対しては、最低1色は岩絵具を使うよう指導したが、高齢者の集団の場合は、無理強いせず、興味を持った人から進めることにした。その姿を見て後を追って岩絵具をもらいに来る人もいれば、最後まで顔彩で彩色することに熱中する人もいて、毎回会場の雰囲気を把握しながら臨機応変に対応した。下絵が単純な絵柄のためか、手に不自由を抱える高齢者や支援学校の子どもたちにも活用が可能なことも把握できた。

最初は画材を前に困り果てた顔をしている参加者も塗り絵が完成する頃には笑顔になる。「絵具を使うのは小学校以来だ」「もっとたくさん岩絵具を使えばよかった」「またやりたい」「私の腕前もまんざらじゃないね」「家に眠っている絵手紙の道具、また出して使ってみようか」など、帰り際にうれしい言葉をかけてもらえてスタッフにもやりがいのあるプログラムとなった。



絵筆なんて久しぶり（入遠野公民館にて）



カーボンコピーは入念にチェック（碧空学童クラブ）



岩絵具はそっと置くように塗ってみよう  
(好間第三小学校にて)

### ●「切り絵・切り紙の楽しい世界 切り絵」

アート・キャラバン 2015～2020 まで継続

対象：中学生以上

定員：20名程度

開催回数：対応できる限り

内容：デザインカッターの使い方を指導しながら、簡単な下絵を準備して一枚紙を切り抜く。切り抜く紙に下絵をコピーする手法は取らず、ホッチキスなどで固定して下絵ごと切り抜く。複数の下絵を準備することで、進度により複数点の制作も可能にした。

必要時間：1時間30分以上

参加費：無料

使用用具：色画用紙 (A4)、デザインカッター、カッターマット、ホッチキス、下絵10種、作品保護用OPP袋、ごみ袋

担当学芸員：柴田百合子



御年90歳を超える参加者の皆さん (好間公民館にて)

開催結果：当初準備した模造紙は厚みがあり、紙サイズもはがき大と小さめを設定したことから、けっこう力が必要な切り抜き作業に苦戦する高齢の参加者が見受けられた。仕上がりも納得のいくものではなかったことから、翌年からは薄手の色画用紙に変え、サイズもA4に変更、参加者の熟練度や年齢を調査したうえで絵柄を選ぶことにした。さらに、後期高齢者のグループには、無理のないハサミで楽しむ切り紙を推奨することとした。



予想以上にうまくできたよ (好間公民館にて)

### ●「切り絵・切り紙の楽しい世界 アイヌ文様切り紙」

アート・キャラバン 2015～2020 まで継続

対象：ハサミが使える人

定員：30名程度

開催回数：対応できる限り

内容：小川早苗氏監修、エテケカンパの会発行の『アイヌ民族もんよう きり絵のせかいへ』\*3をテキストに、アイヌ民族文様への理解を深めながら、簡単な切り紙作業で出来上がるアイヌ文様切り紙を楽しむ。

必要時間：1時間30分程度

参加費：無料

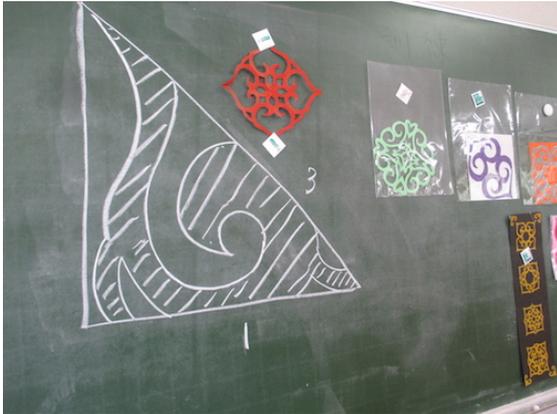
使用用具：アイヌ民族もんようテキスト、はさみ、鉛筆、消しゴム、作品保護用OPP袋、ごみ袋

※参加会場は、金、銀を除く折り紙を一人10枚程度準備する。

担当学芸員：柴田百合子

開催結果：折り紙を四角に四つ折りしたり三角に八つ折りしたものに、折りヤマで繋がるように工夫した渦模

\*3 小川早苗監修 『アイヌ民族もんよう きり絵のせかいへ』 エテケカンパの会、2010年。



三角形八つ折りに描いたモアレ



下絵の精密さにもこだわって（下三阪集会所にて）

様などのモレウ（静かに曲がる）を描き、それをハサミで切り抜き、折りを開くと美しいアイヌ民族文様が現れるという驚きが体験できる内容。紙の折り方、折りヤマの把握、ハサミで切り抜く時に惑わされない工夫などができていれば、年齢を問わず楽しめるプログラム。なお、金紙、銀紙は紙質が固く余計な折りシワが付きやすいため外す。

折りヤマの説明、モレウを描く時の注意、切り抜く部分を斜線などで分けしてからハサミを入れるなど、導入時には3種類の文様を全員で確認しながら切り抜いてみて、ある程度作業が把握できた人から各自自由に模様を選んで作業を進めるようにした。なお、小学校低学年では、テキストの模様にこだわらず、折りヤマでつながる文様の不思議を説明しながらオリジナル文様に挑戦してもらった。毎年のように参加申し込みをする後期高齢者のグループなどは、理解度や記憶力などの格差があり、毎回初めてのような新鮮さで受け入れられ「折紙教室よりずっと楽しい」と毎年同じ感想を聞くという不思議も体験した。社会保険福祉事務所の担当者によれば、丸一年も経つと何をやったかはほとんど忘れてしまうとのこと。それでも、何らかの記憶が蘇るのではないかと思いながら接していたが、むしろ些末なことは忘れ去り、毎回新鮮な驚きや楽しさを味わうことの方が参加者の健康やストレスフリーな生活に繋がるのかもしれないと感じた機会もあった。



みんなのオリジナルができたよ（大浦小学校にて）

### ●「切り絵・切り紙の楽しい世界 3D切り絵」

アート・キャラバン2016～2020まで継続

対象：中学生以上

定員：15名程度

開催回数：対応できる限り

内容：当館所蔵のマティス作品などを下絵に、複数枚の色画用紙を重ねて色分けしながら切り抜くことで1枚ものの切り絵ではない立体的な切り絵を制作する。

必要時間：2時間以上

参加費：無料

使用用具：自製3D切り絵セット（はがきサイズ）2種（下絵、色画用紙セット、画用紙セッティングマニュアル、作品保護用OPP袋）、デザインカッター、カッターマット、ホッチキス、ごみ袋

※参加会場で準備可能な場合は、はがきサイズの額を人数分用意。

担当学芸員：柴田百合子

開催結果：当館所蔵の作品をモチーフに、マニュアル通

り複数枚重ねてセットした色画用紙を、下絵に沿ってマニュアル通りの順番で切り抜いてゆくと様々な色の層が重なって立体的に見える多色切り絵キットを考案。色数が少なく描線も簡易なパトリック・コールフィールドの版画《茶色の水指》を元に作った導入キットを手順に従って全員で切り抜きながら、3D切り絵キットの原理や制作要領などを理解してもらった後、余力のある参加者からマティスの《ピエロの埋葬》にチャレンジしてもらう工程をとった。

参加者は、若くて40代、ほとんどが60代以上ということもあり、デザインカッターの使い方、複数枚重ねた厚みのある紙の切り出し方に難を呈す人も出てくるため、事前に年齢層やカッターの使用法などを説明したうえで可能かどうか参加会場に判断してもらった。原理は、一枚の下絵だけで一気に多色切り絵が制作できるように、絵柄の途切れる部分を複数層に分けて別々に切り抜くことでカバーするもの。たとえば、白い部分が複数個所に点在し、絵柄に沿って切り抜いてしまうとすべてが切り取られてしまう場合に、白の絵柄を複数層に分解し、その階層ごとに他の色紙で挟むことで、上の紙が抑えとなった白の部分が奥からのぞくよう切り抜き工程を工夫してみた。それゆえ、5色で表現された《茶色の水指》は、黒と青の部分が途中で途切れるため、それぞれ二階層で切り抜く工夫をして2枚ずつ使用、他に白、茶、サーモンピンクの3色を加えた7枚の色紙を指示通り重ねて切り抜く工程をとる。《ピエロの埋葬》の方は、背景の白パーツが3階層、他に黒、赤、黄色、青、ピンク、マゼンタの6色を加えた全9枚の色画用紙を重ねた。本来であれば、それらの紙も1色につき5枚、10枚と重ねて厚みを出すことでもっと立体的な効果が得られたと考えたが、2時間弱の作業で不慣れな人でも自力で完成できるようにするため、あえて厚みは最低限に抑えた。切り抜きの際は一番階層の深い部分から切り抜く（つまり最も紙の層が厚い所から切り抜き始める）、切り抜く色ごとにカッターマットを入れ直すなど、留意点が他の切り絵切り紙プログラムより多かったことから、ほとんどの参加者が、手慣らしの作品を仕上げることで手一杯となってしまう、肝心なマティスは宿題として持ち帰ることになった。一方、マティスまで進めることができた参加者の中には、その原理や具体的な階層構成の仕方について興味深く質問し、自分でもやってみたいと

の意欲を持つ人もいた。プログラムとしてはまだ改良の余地があり、このように意欲のある人の知恵を募りもっと面白い展開ができるのではないかと感じた。



作業の手順を確認（錦公民館にて）



もう少しで1作目が完成（豊間公民館にて）



マティスにチャレンジ（大浦公民館にて）

●「世界にひとつだけのグラスアート」

アート・キャラバン 2015～2020 まで継続

対象：小学生以上

定員：20名以内

内容：ルーターを用いてガラスに自由に絵柄を彫り込むプログラム。型紙シールを使い簡単に絵柄を表現したり、オリジナルの模様や文字などを彫り込んだ後、色鉛筆で彩色してより個性あふれる作品に仕上げることができる。

必要時間：1時間30分

参加費：無料

使用用具：ルーター、型紙シール、黒マジックペン、色鉛筆、アルコール含有ウェットティッシュ

※ガラス製品は、参加者各自が持参

※2017よりルーターの消耗品部分は各会場が準備するようにした。

担当学芸員：江尻英貴

開催結果：「みんなで元気になるアート・キャラバン」シリーズで行っていたサンドブラストに代わり取り入れたルーターワークだったが、年齢層によって完成度にムラがでることがわかった。絵柄については、幾何学模様などの型紙シールを多数準備して、参加者が自由に組み合わせて使うことで自分で絵を描くことが苦手な参加者にも好評だったが、高齢者の中には、手が震えてルーターを思うように扱えず、線が震えたり彫りが浅かったりする状態が見受けられて対応に苦慮した。それでも、自分で作ったという達成感が高く「家でもやってみたい」という声も上がったことから、ルーターの簡単な求め方などをアドバイスすることも多々あった。また、感情表現が苦手な子どもたちが集まる施設でも、普段はなかなか気づかれない繊細さや圧倒的な集中力といった子どもたちの可能性を感じる機会ともなった。



カラフルなオリジナルグラス（大浦公民館にて）



グラスをしっかりと押さえて（あざみ野学童クラブにて）



仕上がったらステキなグラスに変身（錦公民館にて）

●「コロコロオブジェに夢中！」

アート・キャラバン 2015～2020 まで継続

対象：小学校高学年以上（年齢が低い場合は大人同伴）

定員：15名

内容：針金造形作家、橋寛憲<sup>はしひろのり</sup>氏考案のコロコロオブジェを作るワークショップ。2015年に橋氏を講師に招へいたことをきっかけに、担当学芸員が指導することについて作者の許可を得てアート・キャラバン事業に加えた。段ボールの支持体に針金で道を作り、ビー玉を転がして遊ぶ楽しい工作。針金を切ったり曲げたり作業があるため、小学校高学年以上、親子参加に推奨できる内容。

必要時間：1時間30分以上

参加費：無料

使用用具：ペンチ、カッターナイフ、ハサミ、段ボールカッター、布ガムテープ、ボンド、ポスカ

※段ボール、針金、ビー玉は、参加会場で人数分準備

担当学芸員：江尻英貴

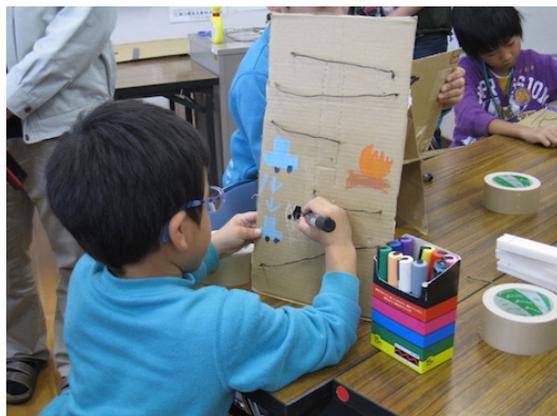
開催結果：段ボールを自由に組み合わせ、好みの長さに切った針金を傾斜を付けながら段ボールに設置して道を作り、上手にビー玉が転がり落ちるように調節する工程は、大人でも難しい。それゆえ、何とか針金の道からこぼれ落ちないように、他よりも複雑な道を作ることができるように、子どもも大人も夢中になるプログラムとなった。また、オブジェの意識をもって装飾や彩色にも工夫できるようアドバイスすることで、単なるおもちゃではなく見せる作品であるということにも着眼してもらえたことも興味深い。ただ残念なことに、2019以降は参加申し込みが皆無となり実施実績を残せていない。参加者は、圧倒的に小学生とその保護者で、公民館等主催の夏休み、冬休みイベントとして申し込まれたことから、子ども以上に熱中する保護者の姿も見受けられた。準備する材料が身近であることから、その後家庭内でも継続可能であり、そのような手軽さも申し込みが激減したきっかけになったのだろうか。



さあ、うまく転がってね（小川公民館にて）



海をイメージして飾りつけ（四倉公民館にて）



大好きな絵を描いて完成だ（山田公民館にて）

●「ペットボトル工作を楽しもう」

アート・キャラバン 2016～2020 まで継続

対象：小学校高学年以上

定員：15 名程度

内容：身近にあるペットボトルをハサミで切ったり編みこんだりして小物入れやランプシェードを作る内容。リサイクルごみから美しいインテリアが出来上がるという体験が参加者の興味を刺激するプログラム。

必要時間：2 時間

参加費：無料

使用用具：ペットボトルハサミ、千枚通し、セロハンテープ、型紙、カラーマジック、紙やすり

※ペットボトルは参加者が準備

※2017 より、ランプシェードを希望する場合は、参加会場がライトベースを人数分準備

担当学芸員：江尻英貴

開催結果：2016 のプログラムでは、ボンドやハンダごてを用いて花瓶や魚などのオブジェを作る内容で募集をしたが、作例写真がなく内容がわかりづらかったのか応募が全くなかったため、2017 よりランプシェードと小物入れに内容を改め、作品見本も入れて募集をしたところ幅広い年齢からの応募があった。募集に際しては、わかりやすい内容と的確な見本が反応を大きく左右することがわかる。作業工程は、型紙に合わせてペットボトルを切り、編みこんだり曲げたりの作業を経て、小物入れやランプシェードを作るもの。見本のランプシェードの効果が絶大でそれを作りたい参加者が多かったが、ペットボトルの切り出しには予想以上の力や手間、丁寧さが要求され、高齢者の中には作業が思うようにできない参加者も見受けられた。募集時にある程度説明しながら参加を促したが、高齢の参加者の中には、自分が認識している以上に手先が衰えているケースもあり対処に苦慮する場面もあった。小学生の参加者では、年齢を考慮して準備したゾウのオブジェは不評で、大人と同じ小物入れに人気集中したことから、その後は、大人と同じプログラムに統一して募集し、対象を見ながら小物入れかランプシェードかを調整した。



みんなで作った小物入れ（ピーターパン学童クラブ）



ペットボトルを切って難しい  
（ピーターパン学童クラブにて）



ランプシェード、きれいだね（四倉公民館）



暑さも忘れて切って、編んで…（四倉公民館）

●「豆本にチャレンジ」

アート・キャラバン2016～2020まで継続

対象：小学校高学年以上

定員：10名程度 開催上限回数：2回

内容：一辺8cm、8ページの小さな本を作るプログラム。

小さいながらも表紙、見返し、扉、奥付と基本的な本のスタイルに沿った製本が体験できる。

必要時間：2時間程度

参加費：無料

使用用具：厚紙、装飾用紙類、リボン、ハサミ、カッター、カッターマット、定規、接着剤

担当学芸員：植田玲子

開催結果：細かな内容のため、10名程度と募集人数が少なめではあったが、幼稚園や小学校の保護者やこれから母親になる女性のための支援施設など、すべて女性の参加者であったことが興味深い。作業に熱中して予定時間を超過する参加者もおり満足度は高い。細かな手仕事をしながら少数人数でのおしゃべりにも花が咲く楽しいワークショップとなった。



磐崎小図書ボランティアの皆さんの作品（磐崎公民館にて）



小さくても立派な製本作業（岩崎公民館にて）

●「美術を楽しむ各種セミナーの出前、始めました 展覧会を10倍楽しむ方法」

アート・キャラバン2016～2020まで継続

対象：特に制限しない

定員：特に制限しない

内容：美術館で開催する企画展事業について、各担当がその内容や見どころについてPRを兼ねてレクチャーするプログラム。

必要時間：1時間程度

参加費：無料

使用用具：各担当が各自データ等の資料を準備して会場へ持参

※プロジェクター、パソコンなどは参加会場が準備

担当学芸員：各企画展担当者

開催結果：2016より年間の企画展のラインナップから、参加者が希望する展覧会について展覧会担当者が自ら会場へ出向いてレクチャーするプログラムとして開始。2017からは、公民館が独自にこのプログラムに参加することを目的とした市民講座を企画し、その申込者と共に直接美術館に来館、レクチャーに参加し、その後で展覧会場を見学するというケースが現れ、その翌年以降も同様の参加が継続した。このケースにおいて公民館は、小規模なものも含めすべての企画展のレクチャーに参加を希望。そのため、参加希望館が複数になった2020では、展覧会担当のスケジュールも念頭に、希望館同士で曜日や時間帯などの重複がないよう調整してもらう工程が必要になった。さらに、人気の高い展覧会には、この他にも単発の申し込み者が複数加わるため、その都度調整が必要ではあった。しかし、その参加者の中には、普段美術館まで出向くことが困難な高齢者のグループも多く、展示作品や会場風景、グッズ類なども含むスライド・レクチャーに熱心に見入る参加者が多かった。さらには、これを機に美術館へ足を運んだという声も増えた。自分一人では来づらい美術館でも仲間となら本当は来てみたい……そのような市民意識を強く受け止め、それに応えたプログラムとなった。本プログラムは、「アート・キャラバン」シリーズ終了後も公民館との共催事業として継続されることで準備が進んでいる。

●「美術を楽しむ各種セミナーの出前、始めました 色・再発見～日常に生かす色彩の力」

アート・キャラバン 2016～2020 まで継続

対象：特に制限しない

定員：特に制限しない

内容：身の回りに溢れる色彩に注目し、その不思議な特徴や効果について考察し、日常での生かし方や楽しみ方を紹介したり、美術館の常設展作品を「色で楽しむ」鑑賞法を紹介するプログラム。

必要時間：1時間程度

参加費：無料

使用用具：レクチャー用デジタルデータ、紙資料

※プロジェクター、パソコンなどは参加会場が準備

担当学芸員：柴田百合子

開催結果：「色」の定義や特徴などについて、科学的視点や心理学的視点から広く紹介し、日常のさまざまな場面で効率よく活用されている様子を具体的に理解できるように、わかりやすい図や写真などをふんだんに用いたスライド・レクチャーで対応。対象が小学生の場合は、スライドは用いず、色粘土を用いた混色体験や色紙を用いた配色体験を通して、色彩が目及ぼす影響や私たちの目がいかに錯覚しやすいかなどを実感してもらう内容とした。また、色彩の心理的効果や生理的反応、それを活用した商業戦略や生活空間のコーディネート、危険から身を守る色の活用など、高齢者などを中心に興味深く耳をかたむけてもらえた。常設展作品の鑑賞については、講座開催時の常設展示作品を色彩の効果を中心に解説することで敬遠されがちな抽象作品にも興味が集まり、所蔵品の「色で楽しむ」鑑賞法に特化した講座を開催して欲しいとの要望も受けることがあった。常設展すべての作品が、色彩による解釈に適しているわけではないので、時期によっては、臨機応変に代替作品を紹介しながら当館のコレクションに理解を深めてもらうよう工夫した。



みんなの色相環（綴小学校にて）



色粘土で混色体験（綴小学校にて）



実験みたいで面白かった（綴小学校にて）

## まとめに

令和の幕開けとともに世界中を席捲した新型コロナウイルス感染症の拡大は、アート・キャラバン事業にも大きく響くことになった。すでに美術館での企画展や普及事業に中止や延期が相次ぎ、2年度4月中旬から美術館は休館、例年通り開催の準備を進めていたアート・キャラバン事業も6月までの5講座がキャンセルとなった。6月末より公民館などの公共施設での事業が再開されると予定されていた講座も復活でき、参加会場と協力して換気、ソーシャル・ディスタンス、マスクの着用、手指の消毒、使用器具やテーブル、イス等の小まめな消毒を徹底しながら講座を開催することができた。特に飲食を伴うお茶の講座では、マスクなしでの会話の危険性や手指の洗浄と消毒の重要性など、感染リスク排除のための呼びかけを繰り返し行った。いわきではまだ、爆発的な感染拡大がある状況ではなかったものの少なからず感染者情報は増加していた。このような状況では、高齢者が多く集う会場での開催のリスクを危ぶんだが、参加を申し込んだ会場の熱意や参加者の喜ぶ顔に後押しされながらキャンセルを除く全31講座をやり遂げることができた。

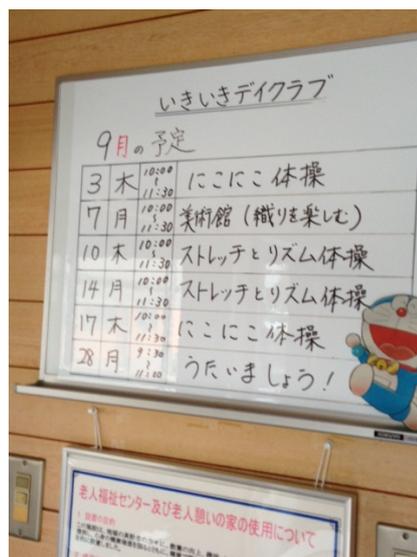
それぞれのプログラムには、それぞれの項で書き記したような問題点や改良点が多々あったが、これらが多くの人々にアートのある生活に新鮮さや興味深さを感じるきっかけとなれたことには確信が持てる。東日本大震災後の復興と復旧をめざした市の事業として平成23年に発せられた、いわきの復興に向けた教育メッセージを承継する「いわき市教育大綱」の中に、当館の普及事業も「地域に根ざした市民文化の継承と創造」という政策体系として盛り込まれてきた。平成29年度より3年間は、市教育事務の点検・評価に係る外部評価の対象となり、アート・キャラバン事業の展開は、教育に関する学識経験者が集う外部評価委員からもその有効性が高く評価され、医療機関や企業での活用へと視点を広げてはどうかとのアドバイスも受けた。時には、地域の社会教育関係者や区長、世話役の方々が見学や体験に訪れることもあり、美術館に行く機会になかなか恵まれない地域へも広く目配りをしていることへの感謝と次への期待の気持ちが寄せられた。

美術館として10年、復旧復興や「癒し」の視点で継続してきた事業は、概ね役割を達成し新たな視点で改変を検討する時期となった。アート・キャラバン事業もその

役割を終え、美術館を拠点とした次なるステージを模索することだろう。しかしながら、広大な面積に点在する過疎と高齢の集落には、年に一回でも良いから「また来てね」と待っている人々がいる。美術館に連れて来たくても連れて来られない事情を抱えた子どもたちもいる。美術館という響きだけで物怖じしてしまう人々も、公民館の知恵を借りて少しずつ美術館に慣れてもらえるきっかけを作ることができた。

新しい体制でより生き生きとした教育普及活動が検討され実現されていく中で、時々で良い、その生き生きとした空気を、少しだけ持ち出して味わってもらいたい人々が、車で小一時間も走れば届くところで待っていることに思い至れるよう、心のどこかに置いて活動してもらいたいと深く願っている。

(しばたゆりこ いわき市立美術館学芸員)



平老人福祉センター2015年9月の予定表

## 付帯資料

## アート・キャラバン実施実績一覧

	開催期間	開催回数	参加人数
アート・キャラバン2015	平成27年5月20日～平成28年1月19日	39	913
アート・キャラバン2016	平成28年5月10日～平成29年1月21日	51	1081
アート・キャラバン2017	平成29年5月10日～12月8日	43	1100
アート・キャラバン2018	平成30年4月18日～11月29日	39	939
アート・キャラバン2019	令和元年5月8日～12月11日	35	712
アート・キャラバン2020	令和2年6月30日～12月9日	31	448

## アート・キャラバン参加者一覧

	施設名	参加回数	参加期間
学校教育機関等 全43回	菊田保育所	1	2015年
	白水のぞみ保育所	1	2018年
	藤原幼稚園	1	2018年
	大浦小学校	9	2015～2017年
	好間第三小学校	1	2015年
	綴小学校	1	2016年
	久之浜第一小学校	1	2017年
	平第二小学校支援学級	1	2019年
	平第三中学校美術部	1	2015年
	川部中学校	2	2016年・2019年
	錦中学校	1	2016年
	中央台北中学校美術部	1	2019年
	チャレンジホーム	4	2016～2017年・2019～2020年
	富岡支援学校高等部	2	2020年
	磐城学芸専門学校	9	2015～2018年
	平地区保育士研究会	1	2015年
	磐崎小学校PTA図書ボランティア	3	2016年・2018年
	西郷子ども会	1	2017年
日本語交流（タイ青少年交流事業）	1	2018年	
国際交流協会（日本語講座）	1	2019年	
社会福祉施設・高齢者 全33回	小名浜地区協議会（雇用促進住宅いわき宿舎）	1	2015年
	小名浜地区協議会（洋光台集会所）	1	2015年
	平老人福祉センター	2	2015年
	三和地区協議会（下三阪集会所）	4	2015～2018年
	三和地区協議会（上市萱集会所）	2	2015～2016年
	三和地区協議会（中三阪集会所）	1	2015年
	三和地区協議会（下永井集会所）	3	2016～2018年

	施設名	参加回数	参加期間
	三和地区協議会（合戸集会所）	2	2016年・2018年
	三和地区協議会（上三阪集会所）	2	2018年・2020年
	内郷老人福祉センター	3	2015年・2017年・2019年
	四倉老人福祉センター	1	2015年
	社会福祉協議会（雇用促進住宅植田宿舎）	1	2015年
	川前地区協議会（第1区集会所）	1	2016年
	川前地区協議会（第12区集会所）	1	2016年
	碧空の会	7	2016～2018年・2020年
	社会福祉協議会（鎌田集会所）	1	2017年
ジュニアリーダー学級 全18回	藤原公民館	1	2015年
	小川公民館	1	2015年
	四倉公民館	2	2015～2016年
	飯野公民館	5	2015年・2017～2020年
	上遠野公民館	1	2016年
	藤原公民館	1	2016年
	中央台公民館	1	2016年
	山田公民館	1	2016年
	草野公民館	2	2016年
	大浦公民館	1	2017年
	泉公民館	1	2018年
	高久公民館	1	2020年
公民館 市民講座 全111回	錦公民館	7	2015～2020年
	小川公民館	6	2015～2019年
	豊間公民館	5	2015～2016年・2019～2020年
	飯野公民館	24	2015～2020年
	草野公民館	2	2015～2016年
	入遠野公民館	2	2015～2016年
	大浦公民館	6	2015～2019年
	中央公民館	8	2015～2018年・2020年
	夏井公民館	8	2015～2020年
	上遠野公民館	2	2015～2016年
	四倉公民館	3	2015～2016年
	内郷公民館	2	2016～2017年
	川部公民館	1	2016年
	神谷公民館	5	2016～2017年・2019～2020年
	錦公民館	2	2016年
	玉川会館	5	2016～2016年・2019～2020年
	山田公民館	3	2016～2018年
	磐崎公民館	5	2017～2019年・2020～2020年
	小名浜公民館	5	2017～2019年・2020～2020年

	施設名	参加回数	参加期間
	好間公民館	3	2018～2019年
	勿来公民館	1	2018年
	江名公民館	3	2019～2020年
	江名公民館（中之作区民会館）	1	2019年
	久之浜公民館	1	2019年
	高久公民館	1	2020年
学童クラブ 全16回	好間二小児童クラブ	1	2015年
	あざみ野学童クラブ	2	2015年・2017年
	あおぞら学童クラブ	6	2016～2018年・2020年
	ピーターパンチャイルドクラブ	3	2017～2018年・2020年
	高久児童クラブ	1	2018年
	セリオス遊学館	2	2019年
	小川学童クラブ	1	2019年
夏休みこども教室 全2回	四倉公民館	2	2015～2016年
その他の施設 全1回	コミュニケーション助産院	1	2020年
総合計		224	

